

# 西の菜時記

特集：土佐の人と菜香亭

◆山口市菜香亭：〒753-0091 山口市天花1丁目2番7号 TEL:083-934-3312 FAX:083-934-3360◆

平成30年1月31日発行  
第47号

発行元：山口市菜香亭  
指定管理者  
特定非営利活動法人  
歴史の町山口を甦らせる会

菜香亭には要職で視察に来たときに立ち寄ったと思われる扁額の言葉は「淵黙雷声」。(釈迦の)深い沈黙が雷声のように聞こえるという逸話から、あれこれ言う前に修行しなさいという意味があるそうです。



国立国会図書館蔵



後藤象二郎の扁額は2階南客間に飾られています。

菜香亭に掲げられている扁額には土佐出身の人の書もあります。それぞれに紹介します。

後藤象二郎(ごとうしょうじろう)幕末、將軍徳川慶喜が大政奉還を行って、政權を朝廷に戻しました。徳川幕府体制がこの英断で終わり、新たな体制が始まりました。それが現在へつながっています。この大政奉還を徳川慶喜に進言したのは実質的には後藤象二郎です。

後藤象二郎は天保9年(1838)に高知城下で生まれました。ちなみに山県有朋と同じ歳です。元治元年(1864)より土佐藩前藩主山内容堂の信頼を得て藩政に活躍。長崎で海外貿易を研究中に坂本龍馬と親しくなり、慶応3年(1867)後藤象二郎は大政奉還論で藩内をまとめ、10月土佐藩主の名で建白書を提出、それを受けて徳川慶喜は大政奉還へと国政の舵をきったのでした。

大河ドラマ「龍馬伝」では、主人公龍馬と意見が合わず衝突するシーンが度々出ましたが、藩論がまとまってからは身分を越えた友情が描かれています。

菜香亭には要職で視察に来たときに立ち寄ったと思われる扁額の言葉は「淵黙雷声」。(釈迦の)深い沈黙が雷声のように聞こえるという逸話から、あれこれ言う前に修行しなさいという意味があるそうです。

山口の迎賓館 菜香亭  
土佐出身のお客様を迎えて



佐々木高行の扁額も2階南客間に飾られています。

佐々木高行(ささき たかゆき)佐々木高行は、文政13年(1830)土佐藩の上士の家に生まれました。ちなみに吉田松陰、大久保利通と同じ歳です。

土佐藩の要職を歴任し、後藤象二郎とともに藩政を助けました。慶応3年(1867)長崎で坂本龍馬と交流し、飲み誘われる手紙が残っています。上士では珍しく下士に寛大だったそうです。

明治新政府でも様々な役職を歴任し、明治14年(1881)から18年(1885)までは工部卿を務めました。この頃の工部省は公共事業を一手に担っていて、井上勝の鉄道事業を積極的に支援しています。

井上勝は長州ファイブの一人で、井上馨・伊藤博文とともに英国へ留学、鉱山技術・鉄道技術を学び、帰国後は鉄道一筋、日本の「鉄道の父」と言われています。

佐々木高行は明治16年(1883)西日本を視察で回っています。菜香亭の書はそのときのものです。「酔有宜 明治十六年五月書于山口客舎 自笑」と書いてあります。「酔有宜」は酔って語り合っている(よいてよしみあり)、酒を飲んで酔ってみんなと仲良くなったという意味です。お酒を酌みかわし山口の人と話が盛り上がったという意図でしょう。

井上勝の故郷ということで、井上の事も思い出していたかもしれせん。

この書は長らく作者不明でした。数年前に落款の形から佐々木高行と判明しました。

後藤象二郎の書と同じ部屋に飾ってあるので南客間は通称「土佐部屋」と呼んでいます。



国立国会図書館蔵

## ◆菜香亭市民ギャラリー出展作品紹介・予定表◆

### <市民ギャラリー出展作品の紹介>

「山口の風景・日本の風景・世界の風景イラスト展」  
—古谷真之助— 11/2~11/5



Citta~わたしの街~山口×スポレート(イタリア)  
—ピピリ・ロベルト— 8/11~8/13



第2回 カメラ片手に漫ろ歩き  
—そぞろ歩きの会— 12/13~12/17



Project Re Yamaguchi 地撮り写真展  
—Yan(山口アートネットワーク)— 1/5~1/8



出展ご希望の方は、2ヶ月前までにお申し出ください。  
(お問い合わせ) TEL:083-934-3312  
FAX:083-934-3360

### <平成30年度 市民ギャラリーの予定>3月

月日	時間	タイトル	主催者
3/7 ~12	10時~17時	萩往還「松陰街道」俯瞰写真展	山口市 HSS 倶楽部

## 法界寺と中谷正亮の墓

下堅小路にある法界寺は、明応年間(1490年代)に第29代当主の大内政弘が創建した浄土宗の古刹です。大内時代の山口町の状況を中心に描いた「山口古図」にも既に記載され、寺のすぐ側には町への出入りを取り締まったと思われる惣門が記載されています。



座高1mを超える大きなもの。これはみごとです。→

法界寺には木食上人が彫ったと言われている子安観音や大黒様、恵美須様があります。また、門前には山口六地藏の一つと言われている「石地藏」があり、山口名地藏として市民から尊ばれています。

大内時代からの歴史のある法界寺の境内に何故か幕末の志士であった中谷正亮(なかたにしょうすけ)の分霊墓があります。中谷正亮は、天保2年(1831年)に萩藩士中谷市左衛門の子として萩に生まれました。藩校明倫館では秀才と呼ばれ吉田松陰にも学び、嘉永4年(1851年)の敬親公の参勤交代に松陰とともに随行し、親交を結んだと言われています。

吉田松陰が野山獄に投獄されると、度々訪ねて、激論を交わしたといわれ、そして、正亮27歳の時に松下村塾に入塾し、高杉晋作らを松下村塾に誘ったと言われています。又、久坂玄瑞と松陰の妹の文との縁を取り持ち、渋る久坂に「君は器量が悪いからと拒むのか」と言い、久坂が文との結婚を受け入れたとの逸話があります。

松陰亡き後には、松下村塾の存続のため、写本をして売り得た財を蓄積し、活動資金として利用する「一燈銭申合」に加わりました。しかし、文久2年(1862年)藩命により江戸に赴くが、病気のため35歳の若さで急逝しました。

中谷正亮の墓は、東京世田谷区若林の松陰神社の境内にある吉田松陰の墓と同じところにあります。松陰を慕い、敬っていた正亮も望むところだったことでしょう。

それにしても、あまり縁のない山口市の法界寺に中谷正亮の分霊墓があるのは、江戸で急逝した正亮を気の毒に思った遺族が父中谷忠兵衛(市左衛門)の墓と一緒に葬ったものと思われる。



本堂に向かって左にあるほこらが石地藏。その角を左にまわると中谷正亮の墓があります。



左側が中谷正亮の父中谷忠兵衛の墓。右側の小さい墓が本人の分霊墓。